胃を切った人の情報紙

ALPHA CLUB

令和５年９月
第461号

「胃を切った人 友の会 アルファ・クラブ」は、胃を切った人が自らの努力と工夫で術後の後遺症を克服していくことを支援しています。会員を募集しています。詳しくは、Webで。

胃を切った人　検索

http://www.alpha-club.jp

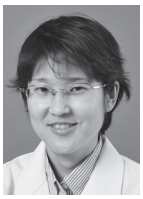
■代表理事
青木照明
東京慈恵会医科大学 客員教授

■理　事
上西紀夫（東京大学名誉教授）
鈴木　裕（国際医療福祉大学病院 院長）
高山美治（医学ジャーナリスト）
梨本　篤（舟江診療所 所長）

あるふぁ随筆

女性外科医

幕内（まくうち）梨恵（りえ）



「私が執刀いたしますが、何か不安がございますか」

皆さんが手術を受けたときの主治医は男性だったでしょうか、女性だったでしょうか。女性の主治医だった方は少ないのではないかと思います。日本消化器外科学会の調査によると、２０２１年度の同学会会員における女性の比率は７・４％しかありませんでした。では、もしご自分の主治医が女性だったら、驚かれる方が多いかもしれません。女性の消化器外科医はまだ少数派です。また、もしかしたら女性で大丈夫だろうかと不安に感じる方もいるかも知れません。その不安の根底にあるのは女性外科医が珍しいということでしょう。

私自身も女性外科医の一人ですが、臨床の場で性別を意識する場面はほとんどありませんし、女性であることで窮屈（きゅうくつ）に感じることもありませんでした。

時折、「女性なのにすごいですね」「女性の外科医なんてかっこいい」と肯定的に話す患者さんもいらっしゃいます。一方「先生が手術されるのですか？」と、言外に（違いますよね？）というニュアンスで言われた経験も、少ないながらあります。そんな時は「私が執刀しますが、何かご不安がありますか？」と、自信を持って返答します。「不安です」と返されたことは、幸いにしてありません。患者さんにとって、手術は一生に一度あるかないかの大きなイベントです。特にがんの手術となると、死ぬ覚悟で臨む方もあるでしょう。不安を感じる医師に手術を受けたくないのは当然のことです。ですから、あえて自信を醸し出し、「安心して手術を受けてください」というメッセージを届けることが大事かなと感じています。

実際問題、女性は外科医に向いているのでしょうか？　私の答えは「向いている人もいるし向いていない人もいる」です。がんの手術を行うには、繊細な手技や慌てない心が重要です。男女問わず、このような資質を持つ人が、良い外科医になると思います。

女性は一般的に男性よりも小柄であり、このことが利点になり、欠点にもなります。利点は体の深部の狭い場所まで手が入ることです。想像しづらいかもしれませんが、狭いところまで手が入るのは、いろいろと便利なのです。欠点は手術器具の多くは、男性医師に合うように作られているので、手が小さいと扱いづらいことです。ただし世界的に女性外科医が増えており、最近は手術器具も女性に扱いやすいよう改良されています。

前述のように、消化器外科医全体では、女性の割合は７・４％にすぎません。しかし年代別に見ると、30歳代は15％、20歳代では21％と、若い年代ほど女性の割合が増加していることがわかります。

また日本で遅れていた女性の社会進出も、政府が改革に本腰を入れ始めています。女性外科医はこれから増えていくことでしょう。20年後、30年後には日本も欧米並みに女性外科医が半分を占めるようになるかもしれません。女性外科医が特別な存在ではなく、「女性外科医」というタイトルの寄稿がなくなる日を待ち望んでいます。

がん研究会有明病院
消化器外科副医長

コロナ感染と進行胃がんで苦闘

――抗がん剤治療を辞退、キーワードになった「自己管理力」――

アルファ・クラブ会員　足達（あだち）　洋六（ようろく）（75歳）

もしニューヨークだったら

私は、２０２２年４月の人間ドックで、進行胃がん（ステージⅢＢ）という診断を受け、翌月に噴門部（胃の上部）をほんの少し残す略全摘の手術を受けました。その後の経過をお話しする前に、胃がん手術の２年前に別件で死線を彷徨（さまよ）った大病について、少し長くなりますが、触れさせていただきます。

２０２０年の３月に、通算36年間の長い海外駐在を終えてアメリカから退任のため戻ることになりました。仕事は、メーカーの販売会社として南北アメリカを統括する本社のＣＥＯの立場で約１万６０００名の従業員とともに働いていました。

赴任地のニューヨークから日本に戻って来たのですが、運悪くニューヨーク側で、その当時流行（はや）り出していたコロナに感染したようで、東京のホテルに入って２日目に高熱が出て、３日目に紹介された東京慈恵会医科大学病院の検査の結果、コロナが陽性とわかり、そのまま即入院となった次第です。運悪くこの時期は、日本でもまだコロナへの有効な薬やワクチンもない時期でした。

結果として約45日間入院し、そのうち２週間ほどＩＣＵ（集中治療室）に入り、意識不明の状況が８～９日間、続いたとのことでした。ほとんど「三途（さんず）の川」を渡る寸前だったようです。

孫とイエローストーン国立公園にて（2019年８月）

幸運だった慈恵医大の入院

アメリカでは、人工呼吸器をつけた人の70～80％の方が亡くなられたと後で聞き、日本で発病し、慈恵医大という最高の病院に入れたことは幸運でした。

このコロナのため、肺がかなりダメージを受け、退院後、①体重と筋力の回復、②呼吸器系の回復に、多大な厳しい努力と時間が必要になりました。

幸い近所のクリニックでの週２回のきついリハビリにより、３ヵ月後にやっと深呼吸ができ、散歩もできるようになりました。しかし、趣味のゴルフの再開には、さらに３ヵ月のリハビリが必要でした。

その後、徐々に体力も術前に近い水準に戻ってきたので、家内と久し振りの日本を楽しむことを予定に入れ、小旅行などで大いに楽しもうという緒に就いたところでした。

帰国の準備やコロナ流行のために約３年ほど健康診断を迂闊（うかつ）にも怠っていたので、２０２２年の４月に慈恵医大の人間ドックでチェックしたところ、前述のように進行胃がんという診断結果となり、直ちに翌月手術ということになりました。この結果には、コロナから生き延び、これからの引退後の人生を妻と

楽しもうと思っていたのが一挙に吹き飛び、大きなショックを受けた次第です。

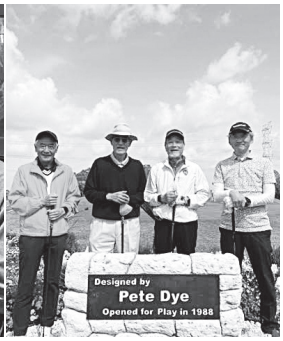
会社に入り、ちょうど50年の節目の年に会社生活を無事に大病もせずに終えたのですが、その直後にコロナの感染と、引き続き胃がんに見舞われ、その運のなさと残された人生の時間とそれを楽しむ体力はあるのかというネガティブな気持ちで、かなり精神的に落ち込んだ状況が続きました。

術後のＱＯＬを高める

手術については、全摘という診断でしたが、胃の全てをなくすということに、理由はわからないのですが「本能的な恐れ」があったので、執刀医の矢野文章先生に無理難題の要望を相談させてもらいました。手術は、約８時間を要し、結果として先生から噴門部の辺りを「餃子」程度の大きさで残すことができたという説明がありました。素人判断では、そのおかげではないかと勝手に思っていますが、これまで食後の逆流現象は全くなく、他の方たちのこの現象での苦しみを知るにつけ、先生にはこの「餃子」の効果に大いに感謝している次第です。２週間で退院し、術後のいろいろな問題にチャレンジすることになりましたが、入院中に矢野先生からアルファ・クラブの紹介があり、早速入会し、「体験記」を始め、さまざまな情報を大いに参考にさせてもらいました。

家族と金沢へ旅行（2023年６月）

▲うなぎ屋で仲間と会食（2023年４月）



▲千葉・木更津でゴルフ（2023年４月）

特に胃を切除した人の課題である①食事の方法、②多種多様な身体的課題、③精神的課題などについて有意義な情報があり、大いに活用させてもらいました。

特に会報の中で非常に有効だったのが、佐川まさの先生のメッセージ「自己管理力が快適生活を創る」（本紙第453号）でした。元来、ずぼらな私にとって、食事の管理、体重減（術前73kg、術後64kg、現在66kg）や、筋力・体力の回復への取り組み、社会との接点の回復など、特に術後のＱＯＬ（生活の質）を高めるための諸々の取り組みにおいて、先生のいわれる「自己管理力」が極めて重要と考えました。

私の場合、与えられた幸運な時間を抗がん治療で苦しむより、いかに楽しく過ごすかというＱＯＬに重きを置いたので、抗がん剤は服用しませんでした。したがって、「自己管理力」は、私にとって術後の大きなキーワードとなっています。

妻に感謝、苦手な愛情表現！

その努力の甲斐もあり、術後１年たち、毎月のカレンダーが楽しい予定で70％くらい埋まるようになりました。主にゴルフ、食事会、麻雀、リハビリなどで結構、忙しくしています。

術後１年の検診では、おかげさまで転移、再発の兆候はないとの診断で一安心です。

これからは、２回の大病を支えてくれた妻への恩返しと愛情の表現（九州男児なので、これが一番苦手！）を多少うまくやること、子供、孫たちの家族、仲間たちへの感謝と恩返し、そして36年間の海外駐在の経験を多少とも若い人や社会に恩返しができればと考えています。

（東京都港区）

妻と伊勢志摩へ（2023年１月）